

来年一月七日から企画展「活動展示」を、昨年度に続いて開催します。

この活動展示という企画展を開催する背景には、予算縮小のため、展示製作費や資料輸送費、広報費等を要する従来規模での企画展を開催することが困難になった、という事情があります。しかし、この予算の縮減を機に、単に企画展を減らすのではなく、手づくりでき、重宝すべき取り組みを企画展事業に組み入れる機会と捉えました。活動展示

は、みなとびあの目指すべき姿を議論して生まれた企画なのです。

具体的には、昨年度の活動展示2010では、「ひきだす」をキーワードに、博物館の調査研究を通じて資料から情報をひきだし、価値を見出す博物館の活動そのものを展示すること、資料から情報をひきだす手法・プロセスを、プログラムとして実際に展示会場で開催して紹介すること、それらを手掛かりとして展示空間を観覧者が自分の経験や知識を使って展示資料から情報をひきだす場



平日の資料整理活動の様子

	観覧者計	日数	1日平均
全会期	2,073	41	50
平日のみ	823	23	35
土日祝	1,196	17	70
行事日	934	12	77
行事参加者計	173人		
行事日観覧者の行事参加率	14%		

活動展示2010実績

とすることを目的としました。この一連の企画のターゲットに想定したのは、当館の展示や講演会に強い関心を寄せて下さっている層です。

広報費を省いて来館者の少ない冬季に開催したため来館者数は少なかったものの、企画に携わった実感としては観覧者の反応に手ごたえを感じました。週末開催の十二回に及ぶプログラムもそれぞれ概ね好評でしたし、目的はある程度達成できたと思います。

活動展示2010の来館者数の傾向を見ると、総観覧者数は二〇七三人のうち平日と土日の観覧者数の比率が二対一でした。原則土日祝日に開催したプログラムにはリピーターの参加も見られました。また、プログラムの趣旨に感じてそれぞれ異なる層の参加者が参加していました。いずれもこれらの参加者と共にひきだすプロセスについて考えることができました。

しかし、平日に実施した博物館資料から情報をひきだす資料整理活動の観覧者数は週末の約半数と少なく、また実際に展示室での活動を踏まえた実感として、自由に来館・観覧している人に対して偶発的で限られた時間の中で、活動展示の意味を伝えるには、もっと工夫が必要と感じました。

そのアイデアとして、二〇一一年度の活動展示では、平日には事前に募った参加者とともに資料整理の作業を行い、資料から情報をひきだすプロセスを共有するプログラムの開催を考えています。昨年度開催のプログラムが、主にひきだした結果の理解のために、そのプロセスを紹介するプログラム構成だったのに対し、ひきだすプロセスそのものに関わり、資料からひきだす作業の手法やおもしろさを伝えることに重点をおいたプログラムといえます。

今年度も古文書等数々の資料を市民から寄贈いただいております。歴史博物館として地域社会の資源とすべく資料整理・管理の作業を進めています。この作業を活動展示の場に組み込むことで、新たな資料群からどのような情報をひきだせるのか、どのように地域の資源として伝えていくことができるのか、利用者のみならず、市民とともに作業する中で考えたいと思います。

なお、活動展示2010の内容・成果については監野学芸員が紀要第7号で詳しく報告しておりますのでご覧ください。

(もり ゆきひと 学芸員)

「淳足柵」沼垂城」の探索

「長者の伏せた「カメ」」

『日本書紀』大化三(六四七)年、是歳条に「淳足柵」を造った有名な記事があります。しかし、その遺跡は不明です。一九九〇年、長岡市和島の八幡林官衙遺跡から、養老(七一七〜七二四)年号を伴う「沼垂城」を墨書した木簡が出し、私は「淳足柵」は、「沼垂城」と表記を変えて存続し、それが新潟市中央区沼垂町の旧地にあった可能性が高いと考えました。さらに、各地に遺跡と長者伝説との密接な関係を示す事例が多いことから、沼垂町旧地の王瀬の長者伝説や河渡・松崎付近の「王五、王六長者」が埋めた「甕」の伝承に注目してきました。

天保一三(一八四二)年九月、新発田藩領村役人で地理学者小泉蒼軒が松崎村と河渡村との村境で一人の農夫に出会い、「この辺りに昔の長者屋敷という所あり」と聞けり、そは「いずれなり」と尋ねました。すると農夫は、「この所なり。道の左側に田あり、ここに長者の伏せたるかめ」といふものあれども、いと大きやかなるものを深く伏せこみて、掘り出すことかなわず。そのあるじの名は、王五と称し、その弟は王六、また王七と、三人のものが宅を三ツにかまえて、賑わわしく住まいし

伝えはあれども、いつの事なりしや伝えなければ知らず」と答えたこと『小泉蒼軒日録』は記しています。(原文の表記を改めた)

奈良県飛鳥池遺跡出土の「亀形石槽」は齊明天皇の祭祀遺構とする解明が進んだ二〇〇五年頃、私は突如「えっ！伏せたるかめ」は、もしかや飛鳥と同じ動物の亀形の石槽かもしれない」とひらめき、以来、私はこの考えの虜となりました。

大阪市四天王寺の「亀井の水」をうける「亀の石槽」が、飛鳥池遺跡の「亀形石槽」に続く第二号と考えるようになりました。そして今、「亀井の水」を天文二十二(一五五三)年に三条西公条が「吉野詣記」に次のように詠んだことが注目されます。

「あしき道六をかくせる亀の水五のこりここにすまさん」

この和歌の数字の六は道祖神、数字の五は五悪五濁のことを意味します。王五や王六という河渡・松崎の長者の名前もそれに関連するのだとすると、この伝承は室町後期に遡り、伝承のもとになった「伏せたるかめ」はさらに古いものになると考えられ、第三の亀形石槽かもしれないと思われてくるのです。

収蔵資料紹介

「大花火」 慶応三年

今年も九月九日・十日の両夜、小千谷市片貝では花火大会が開かれました。地元の方々の心をこめた奉納と日本一の四尺玉で知られています。この花火奉納は江戸中期には始まり四〇〇年の伝統があるとも言われています。当館では、この片貝花火の一八六七(慶応三年)の番付を所蔵しています。

表紙には「大花火」と記され、「片貝邑(楯カ)観音堂境内」で六月二十六日昼から二十八日夜まで開催されたことがわかります。世話人の中には「惣若連中」がいます。「補助」の「大矢幾八・練香屋長兵衛」は花火師でしょうか。

花火は打ち上げ順に記されているらしく、冊子の上段は二十六日、下段は二十七日の花火です。例えば二十七日夜の部の初めには「柳火 一尺二番組連中」とあり、花火の名、大きさ、奉納者の名が記されています。掲載されている花火は一五八発で、昼花火が両日で三六発、二十六日夜が六六発、二十七日夜が五六発です。また、四寸玉が一七発、五寸玉が一〇一発、七寸玉が三三発で、最も大きな一尺玉は七発です。奉納者は姓名や屋号、雅号で記され、連の奉納者もいます。また、来迎寺や千谷川、岡野町、関原などの人もあり、花火が広域で知られていたことがわかります。



番付の最後に「二十八日夜 地雷火・大仕掛 太刀川守太郎・太刀川菊之助・千原富之允・太刀川又八郎」とあり、最終日は仕掛け花火が奉納されたようです。さらに裏表紙には「右之外入組玉多分御座候得共、紙数余り相嵩ミ候二付略す」とある。「入組玉」とは何がよくわかりませんが、単発の打ち上げ花火の合間に小花火も上がったのでしょうか。いずれにしても盛大な花火奉納の様がしのべれます。

(伊東 祐之 副館長)